



Contents

- ・【巻頭エッセー】 香りの記憶 … 沢田千秋 ●表紙
- ・【Parlando Interview】 自分を知るために音楽を学ぶ
本島阿佐子先生 きき手・山本千春 ●2～5
- ・風景の中で⑭ … 図書館長 井上郷子
資料の部屋⑬ … 三宅巖 ●6
- ・【私のおすすめ】 … 山本明里 三上瑞季 ●7
- ・Information ●8

Parlando

ぱるらんど

「語りかけるように歌う」という意味の楽想記号です

No.316

【巻頭エッセー】

香りの記憶

沢田 千秋

先日、本学所蔵のベートーヴェン初期印刷楽譜コレクションから何冊かを、閲覧する機会をいただいた。

19世紀初期に出版された、貴重書に分類される楽譜の数々。まるで大切な贈り物のように、白いしっかりと紙に1部ずつ丁寧に包まれた、その古い楽譜たちの表紙には、華麗な模様と飾り文字で曲名や作曲家名が描かれ、現代の楽譜の顔とはだいぶ趣が異なる。その美しさに、思わず、ほお〜っ…とため息が漏れる。触れるときは、優しく、丁寧に。入館時に使用する名札も、首から下げているは事故の元なので、腕時計同様、外してから触れなくてはならない。そっとページをめくると、ほのかな匂いが鼻をかすめる。古い紙やインクのような匂い。200年前からタイムスリップしてきた、と言ったら大袈裟だろうか。いや、そんな昔に印刷されたのだから、この匂いの中には、ベートーヴェンや当時の人々も感じた「時代の香り」の成分があるに違いない、なんて想像してしまう。

香りと言えば、図書館には特有の匂いがある、それがなんとなく落ち着くし、何か新しい素敵なことに出会えるような気がして、心が躍る。子どもの頃は、小学校の図書室が大好きだった。3階建て校舎の最上階、長い廊下の一番奥にある広くて薄暗い図書室。特に好きだったのは、その中でもさらに隅に配置された世界文学コーナーで、ずらっと立ち並ぶ立派に装丁された重たい本の中から、選りすぐりの1冊を借りて帰るのが、お気に入りだった。裏表紙に糊で貼られた貸出票は、名前が少なければ少ない程、良い。

そこに自分の名前を書いて、返却後も借りる人がいないかチェックする。いないと、誇らしいような、得たような気持ちがしたものだ。

次に通った中学校の図書館は、とてもオープンな造りだったから、隠れ家的な楽しみは味わえず、次のお気に入りになったのは、大学の図書館。2階開架棚に並べられた、作曲家の伝記や音楽史の本、音楽的な興味を掻き立てられるようなタイトルが書かれた背表紙を、ジロジロと見て回るのが好きだった。床は古くて、年代を感じさせる木は焦茶色に艶光りしている。ちょっと滑りそうだな、と思いながら、はやる気持ちを抑えて本棚を練り歩く。ところどころ、木が削れてつまずきそうな箇所があって、中でも、とりわけひどい傷跡の前には、演奏家の伝記や手記が並んでいた。多くの先達が、ここで足を止めたのだろうか。そんなことを思いながら窪みを靴で突ついたりしたのだから、接木の感じまで、よく憶えている。奥のオーディオ室では、ジャクリーヌ・デュプレが弾くエルガーのチェロ協奏曲、アイザック・スターンやヨーヨー・マによるブラームス弦楽六重奏曲、ベートーヴェンやブラームス交響曲のLDに、時を忘れて、よく閉館ギリギリまで視聴した。そんな夜は、暗くて怖い公園も、音楽に満たされた充実感で勇気を持って歩くことができた。本や音楽の中の世界に憧れて、胸を躍らせた日々…。

図書館の香りは、その時々^{（におい）}の熱い記憶を、甦らせてくれる。

●さわだ ちあき 本学准教授（ピアノ）